

2009年11月26日掲載

## 診療混乱の解決策となるか、新型ワクチン「ゲリラ集団接種」

### 東京・江東区で小児科を開業する野末富男氏の挑戦

東京都江東区に、ここ数年、年間約1万人の人口増加を続ける新興住宅地区がある。増加人口の多くは乳幼児を抱える世帯で、小児科の需要が日常的に高い場所でもある。今年(2009年)の新型インフルエンザ(A/H1N1pdm)の流行により、各医療機関の診療活動が大きな影響を受けるなか、この地で行き詰まりを打破する可能性を見出した開業小児科医がいる。

ご多分に漏れず、自身もワクチンの問い合わせ殺到で疲弊していたが、11月21日、自身で「ゲリラ作戦」と表す保育園での任意集団接種を1人で実行に移した、のずえ小児科院長の野末富男氏にその経験談を聞いた。



今や学校などの前を通りかかると、児童たちが新型ワクチンを接種しているか気になってしまうという野末富男氏。「集団接種を小児科だけでなく、他科の開業医でも協力を検討してもらえれば」とも。

#### 最初のきっかけは「軽い気持ちで」、感染拡大で急遽実現

広辞苑によると、「ゲリラ」とは、「奇襲して敵を混乱させるなど、遊撃戦を行う小部隊。また、その遊撃戦法」と記されている。

野末氏の医院では、昨年(2008年)の季節性ワクチンの接種回数はおよそ3,000回にのぼった。今回の新型ワクチンは、出回っているワクチンの数が少なく、接種回数だけを比べられないが、鳴り止まない問い合わせ電話に困惑する日々が続いていた。周囲からは、通常の診療が全くできないため新型ワクチンの接種を取りやめた医院もあるとの話も聞こえてくる。

一方、同氏が嘱託医を務める保育園や小学校からは、連日インフルエンザ発症者の集団発生状況が刻々と届く。同氏は最初、「軽い気持ちで」嘱託を務める保育園の1つに集団接種を提案してみた。しかし、意外にも園側からは「他の関連施設との対応に差があると困る」と難色を示され、

診療の忙しさなどもあり、あきらめかけていた。その後区内で保育園、小学校を中心とした流行が起きた際、今度は園から打診があり、急遽 11 月 21 日に集団接種が実現した。

偶然、その前日の 20 日には、江東区保健所が各医療機関に「乳幼児、学童への集団接種に積極的に取り組んで欲しい」旨の通達を出した。同区に隣接する中央区では既に同区医師会の呼びかけのもと、有志の開業医が新型ワクチンを持ち寄り、23 日に小児への集団接種を実施した。また江東区でも 12 月ごろに集団接種の実施に向けた準備を進めており、今後、同様の対応が広がっていく可能性がある。

### 接種にかかる時間はクリニックの半分

しかし、インフルエンザワクチンの集団接種が取りやめられてからかなりの年月が経過した現在、経験のある医師は少ない。「ただでさえ忙しいのに集団接種なんて・・・」という声も聞こえそうだが、「ゲリラ集団接種」を自身で実行してみてどうだったのか。

初回の評価は「短時間かつ一度にまとまった人数への接種が可能で、時間、人員の面からも非常に効率的」と上々だ。今まで同医院では 50 人の接種を 3 時間かけてやっていたのに対し、当該保育園では 66 人に 1 時間半で接種が終わったという。

時間が短くなった一番の要因は「カルテ記入が不要なこと」。また、開業医にとっては「職場のスタッフではなく、保育園の看護師が診療補助してくれるため、自院スタッフの過重労働が軽減できること」も大きい。

あまりに効率的だったため、常駐の看護師がいない保育園では自身で人件費を負担するうえ、「国の事業だから」と園長と交渉。合意を取り付け、他の保育園から一時的に看護師を連れてくるといった対応も進めているようだ。

また、有効使用に懸念の声もあったワクチンの大容量バイアルについても、死腔がなくゲージサイズの小さいインスリンシリンジを使えば、50 人分を過不足なく使い切ることができ、問題がないという。

### 疲弊する小児医療の現場を少しでも支えたい、支えて欲しい

「以前勤務していた病院では、今やベッドの 3~4 割がインフルエンザ重症患者で埋まっていると聞く。また提携先の病院でも重症患者が集中し、病院勤務の小児科医はまさに限界の淵に立っている。開業小児科医も電話対応や接種日時を新たに設定したことで、通常診療が夜間に及ぶだけでなく、休日も予防接種にあて、休みなしで働き続けている医師もいる。そうした悪循環を断ち切るためにも、自分が今できることはこれくらいしかない」—嘱託先の保育園や学校に自ら働きかけるだけでなく、今後はワクチンの入荷状況も見ながら、小学校と一緒に嘱託を務める内科、耳鼻科、眼科の医師にも協力を呼びかけて行きたい、と野末氏。

「1 人で 100 人接種すればうんざりするが、3 人でやればそれぞれ 30 人、1 時間で終わる。保護者や児童、保育園からは感謝されるし、診療レベルの確保にも寄与できるはず」と前向きだ。さらに現在は嘱託先の保育園、小学校だけでなく、嘱託医がいない学童クラブなどにも集団接種を働きかけており、引き続き来シーズンも活動を続けていくとしている。

(坂口 恵)

## 取材こぼれ話

当初、生産数が少ないため、国が優先順位を設定した新型ワクチン。しかし、多くの希望者が病医院に殺到する事態は今や避けられない情勢となっている。さらに、発症年齢や重症化の疫学が明らかになるなか、国や自治体が相次いで小児の接種時期前倒しを発表したことがさらに医療現場の混乱を大きくした。

現在でも、対象者全員に行き渡る十分な量のワクチンは届いていない。小児への前倒し接種が発表され、病医院への問い合わせはさらに激増。職員数の少ない個人開業医では、度重なる電話対応や診療時間の延長は、勤務体制そのものだけでなく、職場の士気にも関わる死活問題だ。

同医院でも月曜と土曜の週2日、インターネット予約システムによる50人/日の接種予約枠を設けたが、更新からわずか15秒ですべての予約枠が埋まる殺到ぶりだ。また、問い合わせ電話のあまりの多さに受付職員が疲弊し、「電話予約は受け付けない」と医院ホームページならびに電話メッセージで告知を続けている。しかし、自治体が一般向けに公開している受託医療機関リストには、問い合わせ先に医院の電話番号しか掲載されていないため、毎日「新型ワクチンを接種できるか」という電話は絶えないという。

なかには母親たちが7~8人で、居住する地区近郊の受託医療機関に片っ端から電話をかけて接種予約をまとめて取る荒技を編み出した人たちもいるほか、予約を受けられないと聞くと電話口で泣き出す母親もいるなど、「新型ワクチンを何としても受けたい」という必死さに驚かされたと同氏。

今では学校や保育園で集団生活している児童たちを見かけるたび、「新型ワクチンをまとめて接種してあげたい思いに駆られてしまう」と笑う。自身は「新型インフルエンザが流行し始めても、なかなか集団接種そのものを思いつかなかった」と言うが、押し寄せる来院者への対応を逆手に取り、自ら積極的にコミュニティーに働きかけていくことで、少しでも医療現場の支えになれば、という強い思いが伝わってきた。